

□ 声 楽

國 土 潤 一

今回も公共性を欠いた演奏会チョイスだったのを（そもそも声楽関係の大小の演奏会の何と多いことか！）、まず最初にお詫びしておく。

2月6日に東京オペラシティで行われた文化庁主催の今回の「明日を担う音楽家による特別演奏会」は声楽家の夕べ。文化庁新進芸術家海外研修制度（所謂「在研」）の成果を発表するこの演奏会だが、ソプラノの清野友香莉、今野沙知恵、種谷典子、メッツォの藤井麻美、テノールの伊藤達人、小堀勇介、バリトンの原田勇雅、門間信樹の8人が、大勝秀也指揮東フィルの伴奏でオペラのアリアと二重唱を披露した。年度によって「当り外れ」のあるこの演奏会だが、今回は水準も高かった。今後、健全に更なる成長を期待したい。

音楽の友ホールで継続されている塚田佳男が企画構成する日本歌曲のシリーズは、多くの日本歌曲ファンを集めて盛況。6月14日には「大御所」瀬山詠子が登場し、雙鑠たる歌いぶりで三善晃の「四つの秋の歌」で独自の世界を披瀝した。

その瀬山詠子の愛弟子のメッツォの加納悦子が、3月9日代々木ムジカーザで自主リサイタルを開いた。オペラやオラトリオで実力を示す加納だが、その本領はドイツ・リートにある。しかし、なかなか加納へのドイツ・リートの演奏会の発注がないのを常々残念に思っていただけに嬉しい。筆者と同じ思いの人も多かったのか、小さな会場は満席。自主リサイタルだけに大胆なプログラミングだ。「詩人ヘルダーリンの世界～20世紀の歌曲を集めて」と題し、ピアニストにして「詩と音楽」の学術研究で東大の博士号も取得した子安ゆかりと共に、朗読とトークを交えながらの楽興の時は、晦渋さとは無縁の時空を聴き手に与えた。

「東京・春・音楽祭」で加藤昌則の企画構成・ピアノ・お話での「ベンジャミン・ブリテンの世界II」が、3月19日上野学園石橋メモリアルホールで行われ、カンティクル第3番「なお雨は降る」、「セレナード」がテノールの鈴木准によって歌われた。鈴木准のブリテンに対する愛情がしみじみ感じ取れる歌唱を堪能する。

4月7日白寿ホールで望月哲也自身がプロデュースするシューベルトの「美しい水車小屋の娘」を聴く。朴葵姫のギター伴奏での演奏で、シュライヤーとラゴスニヒの演奏を聴いた世代もいるだろう。こういう形態ももっと普及しても良いかもしれない。望月は些か伸び悩み状態だろうか？

ストラズブル国立音楽院教授の小林真理が、秦はるひのピアノと共に5月7日に豊洲シビックホールホールで、ドビュッシー没後100年を記念してのリサイタルを開いた。コンディション不良からか、前半はいつもの小林の実力が出せなかったが、後半では滯仏期間の長さで恥じぬ歌唱を展開した。ここが身身の身体が楽器の音楽の難しいところだ。

今売り出し中のメッツォ、清水華澄は、6月26日紀尾井ホールで「未来の自分へ」と題してリサイタルを開いた。意欲の空転もあったが、「守り」に回らない前向きな姿勢が清水の強みだろう。

瀬山詠子よりは年下とはいえ米寿を迎えたバリトンの川村英司が、6月28日豊洲文化センターホールで久しぶりのリサイタルを開いた。シューベルト、ブラームス、プフィッツナー、ヴォルフという川村の十八番かつ思い出ある曲目を、お話を交えながらしみじみ歌い上げた。東由輝子が、丁寧に、思いやり深く川村の唄に寄り添い、心温まるひと時が生まれた。

米寿より一回り若い喜寿を記念した松本美和子のリサイタルは、7月11日に紀尾井ホールで行われた。ピアノをヴィンチェンツォ・スカレーラと椎野伸一が受け持ち、松本の弟子、佐藤美枝子と米澤傑らが加わった。椎野と共に作った畑中良輔歌曲の味わいを堪能。

人生100年時代と言われる昨今だが、大ベテラン達の活躍が目立つ1年でもあったろうか。

日本歌曲の分野でもさまざまな試みが行なわれている。「新作歌曲の会」も7月30日で第19回を迎えた。また、日本歌曲協会が主催する「新しい日本歌曲の煌き～邦楽器とともに」も10月29日で第13回を迎えた（共に東京文化会館小ホール）。後者では洋楽である声楽家と邦楽器演奏家との共演による作品を初演している。この試みから何が生まれるか、期待するものはある。新作が生み出された後の再演の機会の少ないこと、良い作品かそうでないかを識別する見識が醸成されていないことなど、課題はまだまだ山積みだが、これらの努力に敬意を払いたい。

10月23日に東京オペラシティ・リサイタルホールで、「彩美歌（あやみか）」という女声グループの演奏会を聴いた。ソプラノの高橋敦子、メッツォの木下泰子、三宮美穂、ピアノの千葉かほるの名前の頭文字を取ったグループ名だそうで、彼女たちが進めている木下牧子の作品ばかりのプログラムでの、同一規格のCDの発売に合わせてのもの。大勢の声楽家たちの活動の展開の可能性のひとつとして、このような企画は注目して良いだろう。

10月31日には東京文化会館小ホールで、ソプラノの長島剛子とピアノの梅本実によるリートデュオ・リサイタルを聴く。19世紀末から20世紀のドイツ歌曲を重点的に採り上げて毎年1回のリサイタルを重ねるこの夫妻も、「ヘルダーリン歌曲」ばかりのプログラム。日本でこのようなマニアックなプログラムが成立する時代になったのだ。

NPO法人日本声楽家協会が主催している日暮里サニーホールでの独演コンサート第131回は、寺谷千枝子。新進作曲家にしてピアニストとしても声望を集めつつある山中惇史のピアノで、前半がシューマンの歌曲、後半が山中惇史と前田佳世子への新作歌曲の委嘱初演というプログラム。このような、小さい空間で緻密な音楽を楽しむ音楽会も、多くあるに違いない。

外来声楽家では、5月15日のナタリー・シュトゥッツマンがピリオド楽器団体のオルフェオ55を自ら指揮してのイタリア古典歌曲の演奏会と、6月27日のフランチェスコ・メーリのリサイタル（共に紀尾井ホール）が心に残っている。演奏の本質である内面の共感と充実、そして現代の声楽家ならではの高い声楽テクニックがそこにはあった。一方、7月3日のモイツェ・エルトマンの紀尾井ホールでのリサイタルでは、大きな失望を味わった。メンデルスゾーンとモーツァルトだけのプログラムは、ドイツ人としての自負さえ感じさせられたが、今のドイツ人歌手の多くと同じく粗雑な発音と安手な表情付けに閉口する。「伝統」の重みとそこに新たな足跡を残すことの難しさを、改めて考えさせられたこれは、我が国の芸術家にも当てはまる大きな課題である。